第８回ランチタイムセッション　音楽と本の出会い（4）

ジョン・グレイ『猫に学ぶ』みすず書房、鈴木晶訳 2020 年：猫の登場する音楽

１．いかに良く生きるか？

グレイの『猫に学ぶ』みすず書房は、生きづらくなったと感じている人にとって、とくに心が落ちつく本です。作者は、著名な哲学者なので、レッキとした哲学書であり、近代哲学に対する鋭い批判を含んでいます。しかしこれらの批判は、東洋思想にもとづくものが多く、われわれにとっては、大きな違和感はありません。さらに、猫という身近な動物を題材にしての語り口は、耳に優しく伝わってきます。堅苦しいという印象がある「みすず書房」の本の装丁にしては珍しく、猫がデザインされた親しみやすいものになっています。「いかに良く生きるか」ということに対する、答えは一つではありませんが、本書のここかしこに「生きることのヒント」があふれています。

２．猫の音楽の様々

猫にちなんだ音楽はたくさんありますが、その代表選手は、「ネコふんじゃった」でしょう。ピアノを習い始めたころに、遊び弾きをして叱られた思い出がある人は多いのではないでしょうか。「ネコふんじゃった」の旋律は世界各国に広まっており、その歴史に関する CD が出版されたこともあります。ある意味では、世界でもっとも有名なピアノ曲です。「ネコふんじゃった」をはじめとして、猫にまつわる様々な音楽を聴いてみたいと思います。

「ふんじゃって」ばかりいると猫がかわいそうなので、「猫を踏まない」ネコに関する名曲を聴いてみましょう。ミュージカル「キャッツ」から「メモリー」(オーケストラ編曲)、昭和にヒットした「黒猫のタンゴ」の原曲（イタリアのタンゴ)、アメリカの猫の曲、さらにはベルトミューの組曲「猫」も紹介します。

「ネコの祈り」という曲は、むしろ音楽話のような作品で、たくさんの動物が神様にお祈りしに集まってきます。その中で、「ネコの祈り」は超然としています。さすがにお釈迦様の臨終に立ち会わず、干支に入れてもらえなかった動物だけのことがあります。内容は、聴いてのお楽しみ。最後の締めは、ロッシーニ作曲の有名な「ネコの二重唱」です。一世を風靡したソプラノ歌手のグルベローヴァがカサノヴァと二匹の猫になりきって大変な迫力で歌います（鳴きます？)。

３．犬の音楽はあるのか？

犬を扱った文学はたくさんありますが、犬に関連する音楽は案外少ないようです。だれか面白い犬の本を書いてくれれば、犬の音楽をがんばって探してみますが、いまのところネコには勝てないように思います。猫派か犬派かと聞かれると、性格判断の踏み絵を踏まされる気分ですが、よく考えると猫が好きな人は犬も好きで、その逆も真理だと思います。動物好きか動物嫌いかの問いの方が、その意味では的確ですね。

というわけで、今回は、犬派を自称する人もぜひおいでください。ひとつでも心に残る名曲をお土産に持ち帰っていただけば幸いです。

演奏予定曲目

ヘルムート・ランゲ編曲「蚤のワルツ」岡崎悦子と神谷都志の連弾

小原孝「猫ふんじゃったスペシャル」より

吉松隆「ネココ変奏曲」

アンドリュー・ロイド＝ウェッバー「メモリーズ」ミュージカル「キャッツ」より

「黒猫のタンゴ」（ＮＨＫ響の４人のチェリスト）

アンダーソンの猫のワルツ

スーザ、行進曲「カンザスのワイルド・キャット」

ベルトミュー、組曲「猫」

メシュヴィッツ「ネコの祈り」

レクオーナ、黒猫

ロッシーニ、猫の二重唱